
神が俺を不幸にした

塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神が俺を不幸にした

【Nコード】

N8656X

【作者名】

塩

【あらすじ】

マグロンのやつの改変版です

一話目 事故の死人

俺の意識が戻る。

ここはどこだ？人の声も車の音も聞こえない、目蓋が重くて開けられない。

車に撥ねられそうになっていた子供がいて、思わず……あれ、その後が思い出せない。

思い出せるのは、俺はそんな人助けをするような人間ではなかったということだけだ。

一種の気の迷いか、あの日の自分と重なって見えたからか。

俺の意識は深い谷に落ちていった。

「おーい、聡史起きんか」

老人の声が聞こえた思ったら目が軽くなった。

というか、誰だ？

目を開ける。

「お主はもう、死んでおる」

「えっ」

思わず出た声にも驚く。

死んでることを理解できず驚く。

台詞のパクリっぽさにも驚く。
セリフ

落ち着け。ミィー、クール、クール、クール……

「えっと、あなた誰ですか」

「ワシは神じゃ」

「ヘエ、ソウナンデスカ（棒読み）」

……

「えっ」

「とりあえず、神だということは信じてもらえたのだな」

この空間から脱出する方法を考える。

考えてみて「神」に聞くのが良いと思い、「神」に聞いてみた

「神様あ、どうすればここから出られるのお？」

「キモいッ」

「こっから出るにはどうすりゃ良いんだ」

「それはな、お前の意識にかかっている錠^{ロック}を解けば良い。わしがお主の意識に入れるようにな」

なんだ、そんな簡単なことか。

俺は目を瞑った。

「こんなもんか？」

「成功だ。前世の行いとかを総合して考えて、お主を生き返らせてやろう。天国になど行かせない」

と神は俺の意識に直接言った。

次第に体が光った。

世界が暗転した。

気がついた時、俺は、ユリの花の匂いに包まれていた

……まさかね。

まさかそんなタイミングで生き返ったんじゃないよね。

そうでないと信じたかった俺は、“ふた”を持ち上げて外を見る。

そこは俺の葬儀場だった。

泣いてる親類とクラスメイト見た瞬間思わず空に言い放った。

「この^じ＝＝野郎おおおおお」

幼馴染と神と俺

《AM7..30 家》

神と生き返る為の取引をしてから一週間。

俺は疲れ切っていた。

神のタイミングの悪い事、俺は棺桶に入れられた直後に、生き返ってしまった。

地元の新聞に取り上げられ、テレビにまで取り上げられる始末だ。おかげでこの五日間ほとんど眠れていない。

だが、無情なことに学校は行かなければならない。

俺が通っている学校は、カトリック系の学校で、不良なんかはいない。

みんな偉い。

たいして事件も起きない。

……訂正しよう起きなかった。

(おーい、聡史。聞こえておるか?)

この頭に直接響いてくる声は……と考えるまでもなくあいつだ。

「ちっ、クソジジイが」

(クソジジイ、とはなんじゃ!。〇。〇〇ぞこら!)

「どーせできねんだろはいはいワロスワロスーっ」と

俺は神をディスりながら、学校の制服に着替える。ちなみに、

学校の制服は普通のブレザータイプ、普通すぎる。

俺は眠い目を擦りながら階段を下りて、軽い朝食を作り、一人で食らう。

俺の家は俺、母さん、父さんの3人家族で成り立っている。

父はエリート、母は美人、俺は……頭脳も外見も父親に似てしまっ

た。

【業務連絡…津田↓椎名…なんで一人で朝食食ってんの？

母親主婦なら仕事しろよ。

共働きならそう書けよ】

口に残ったパンを咀嚼しながらスクールバッグを担ぎ、家を出た。

《AM8…00 通学路》

「おっはよう！」

うごおっ！

後ろから来た何かのせいで、ダイナミックに前のめりに倒れた。

「いつてえ〜」と、服を払い、後ろを見ると、えへ〜というオノマトペが見えるような笑顔を浮かべる幼馴染の姿があった

「おい、佐奈。お前いい加減やめろって」

「いいじゃんか。あつ、そうだ聡史……」

「何だ？」

（おい聡史。そやつはいまにもお前にとびつつ……）

「ん？」

神に聞き返すとほぼ同時に、佐奈が俺に飛び掛ってきた

「I LOVE 聡史……！！」

俺は華麗に横に避けた

「ぎゃーー」

なさけない悲鳴をあげながら飛んでいく佐奈。

それを、無視して俺は学校へ行こうとした所を神が叫んだ

（おいっ！いいのか本当にいいのか！？）

「いいんだよ、どうせ士郎のところに飛んでいくんだから」

（士郎というのは誰なのじゃ！というか普通見捨てんじやろうがー！）

「もういいから！」

俺は上履きをはくころ、一限目の始まるチャイムになった。

《PM2..45 教室》

「おい、聡史。一緒に帰ろ。」

放課後。俺は佐奈と一緒に帰る約束をしていた。

佐奈との喋りを放置し、一人反省会。

しかし、今日はひどかった。

授業中、神が、

（こんなのも分からんのか）

だの

（それは、違う！）

だの、

しつこく行ってきた挙句

「おんどりゃあ、黙ってろー！ー！！！」

と、叫び、皆から白い目で見られる始末。

反省会を終え佐奈の話に耳を傾けるともうすでに喋っていたらしく、相槌を打たない俺にローキックの嵐。

「痛っ！分かったからやめろ！」

「ええ、まだまだ蹴ってたかったのに」

本当によく分からんやつだ。

俺が佐奈と駄弁っていると、後ろからもう一人の幼馴染、士郎が来た。

士郎とは、佐奈と会う前からの幼馴染で、一言で言う運動部のイケメンだ。そんなのが、こちらにダッシュしてきた。

俺たちの前を少し通り過ぎてからからは叫んだ。

「部活を作ったんだけど、はいつてよー！」

はっ？と、思った瞬間、士郎はダッシュの勢いを殺さずに完璧なパ

ンチを、俺の鳩尾に決めていた

「なっ！き・・・きさ・・・ま、お・・・れ・・・を裏切った・・・なあ」

【業務連絡・・津田↓椎名・・意味わかんない。解説が必要。日本語でおk】

その一言とともに俺の意識は、地の底へ落ちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8656x/>

神が俺を不幸にした

2011年12月10日07時55分発行